

子どもと
(12)

はる、そして巣だち

清水 光子

「早春」の「梅をちこち南すべく北すべく、幾つもの群が出来、だんだんと春めいて来る幼稚園の朝である。それにしても、どこから来る此の春の匂いであろう。」(『育ての心』より) 子どもと「春よこい、早くこい、」と待っていた春、ポカポカ春がやって来た。春が来た 春が来た どこに来たの リズムのように、また、ヴィヴァルディの「四季」の「春」の出だしのリズムの軽やかさに乗ってのように。コンクリートジャングルの谷間にだって、アスファルト道の僅かなやぶれの間にも日光は降りそそぎ、やさしい雨に時たま慈いづくしまれて小さな緑色が萌え出て来た。

「ね！かわいい花が咲いているよ！」と年少組のY君がとんで来ていうので行ってみる。花壇の隅に、まるで碧い瞳のような色のクロッカスが咲いている。「まあ、ほんと！」その傍にはこれも碧い小さな花がいくつもこちらを見上げている。「これ、大いぬ

のふぐりというのよ、猫の目草という人もあるわ。」などは言わずに、『育ての心』の「三月のことばを繰り返し心にぎざむ。」「三月の春は早く子どもらに來る。一歩一歩近づきくる小さい春を、その時々は一ぱいに享け、一ぱいに楽しんでゆく子どもらに。」

子ども達といっしょにお雛様を飾る。箱をあけると虫よけの匂いがして哀しい。でも、ていねいにやわらかい紙で包まれたお雛様が現われると嬉しくて、「ようこそ！今年もこうして子ども達とお迎えてきて、ほんとうにうれしうございます。」と心で話しかける。お雛様達も何だか晴ればれとした表情にみえる。「この人泣いてるの？この人は怒った顔してるね。」と段に飾りながらつぶやいているM子ちゃんの「使丁」のひなでさえも。

「うちのF子、ご存じのようにお人形遊びしない子ですのね。それがきのう幼稚園でお雛様飾りのお手伝いした、って話すんで、私が嫁入るときに持って來た小さなのをあの子と一緒に飾りましたの。」F子のお母さんから翌日報告があった。私、老婆も○十年前の粗末なのを我室の隅に飾って、

仕つる つかま 手に笛もなし 古雛 ひいな

松本たかし

そのままのを。そして、紙雛ではないけれど

紙雛や 恋したそうな 顔ばかり

正岡子規

と眺めている。

いきいきと 三月生る 雲の奥

飯田龍太

日に日に日足が伸び、雲が空が霞みめいてくる。「園丁雑感」で倉橋惣三先生は「春が来る」という題で「冬らしい一切の名残りを取除けよ。壁を払え、床を洗え、額の絵も取り替えよ、隅棚の装飾も取りかえよ。そして春を春らしく迎えることを忘れるな。」と言われ、なお「春が来る。どこからくる…(中略)…子ども達をしてこの春を迎えしめよ。この春と交らしめよ。この春に親しましめよ。」と。「外へ外へ」には「春風が誘いにくる。蝶々が迎えに来る。…(中略)…かぐわしく新しい野の空気と万人の浴するに任せて、与えて惜しまない豊かな日光と、皆これ子どものために備えられた自然の恩恵ではないか。何者の無情漢ぞこの好季においてなお子どもに足かせをする。…(中略)…窮屈な保育室の机・腰掛からつとめて子どもを解放せざる。何も屋根の下のみが保育の場所ではあるまい。…(後略)」単に物理的に床を洗い、壁を掃うのではないことは無論である。が、大人は兎もすると、学年の終わりである三月に心の落ちつきを失ってしまう。年長組に関わる保育者は殊に、巢立ち間近かな子ども達に愛しい、惜しい思いをつのらせ、

一日一日をいとおしくすごす三月なのである。

くれなゐを 冬の力と して堪へし 寒椿みな 花をはりたり

馬場あき子

小石川植物園への道、椿の花びらが散り敷いているのを拾って、ていねいに紙に包んでいるT子はやがて単立つ子の一人。梅林を訪れたとき「あ、いつかこの木の下でおべんとう食べたね。先生、赤い花と白い花と匂いがちがうのね。」といったSも。

〃梅の蕾もふくらんで、もうすぐ学校嬉しいな〃とうたう修了間近な子ども達と湘南海岸へ遠足した。海水浴客に賑わう夏とは別の地のように、人影も少なく、僅かにサーフィンで遊ぶ若者の姿が見えるばかり。広々とした海岸を思う存分走ったり、砂山を作ったり、貝殻を拾ったり、パチャパチャと既に大分ぬるんだ海に入ったりして遊びに遊んで、おべんとうは流木を集めてのたき火を囲んでした。貝殻や、石ころや、ぬれたくつ下の入ったリュックを背負って乗った帰りの電車で、どの顔も、誰の瞳も輝いて、生き生きと充実感に溢れていた。この子らの心の中に、どんな思い出が残るだろう。それは大きな宝石でなくても小さな小さな貝がら、石ころであってでもいい。その子に美しいものならいい、そうあって欲しいと切に祈ったのである。それにしてもこの子ども達から何という多くを贈られた私だろうか。こちらから何もしてあげないのに、何と大きく育てられたことだろう。とありがたさ一杯の思いだった。そして思い出すには最初に担任した子ども達の修了

の日のこと。なぜあんなに涙が出て止まらなかったのだろう、と今でも我ながら訝しむ。そして、何回か重ねるにつれて、はじめ程涙が出なくなるのに気づいて我心が乾いたのを嘆く思いで切なかつたのである。

『育ての心』の中の、「子ども達を送る日に」で、「教育」そんなことよりも、あなたを迎える朝な朝なが私の楽しみでした。「あなたの為」そんなことよりも、あなたといっしょに遊ぶことが私の喜びでした。」と。なおつつけて「ただね、今になって考えてみるとずい分行き届かないことが多かったと、それがすまないのですよ。けれどね、ごめんささい、なんて、そんなことは決して言いませんよ。私の足りないことを、あなたは何とも思ったりしていないと、それが、しっかり、私にわかっているから——」。実に実に、何もかもお見通しだった倉橋惣三先生ではある。

宇宙の動きは一瞬の休む間もなく、オリオンは夜毎地平に近づいてきた。春のお彼岸頃は卒業、終業と一種の愁いをもたえた華やかなセレモニーがあちこちで行われる。

一方、子ども達の家庭環境が何かと変わることも多い三月でもある。その揺れの中で、子どもの心は、或いはおそれや不安におののくこともある。ためらいもある。嬉しい希望に溢れた経験ばかりではないだろう。桜はな便りがきかれる頃、わくわくと胸躍らせてピカピカの一年生になる子ども達、大きい組になると張り切る元気な子たち、誰もがそれぞれの成長の途にしたがつた育ちをして欲しいのだが……。

情報化社会ということばさえ既に古くなってしまった今日、「人間とは話す動物である」と言ったノーバート・ウィーナーの死後四半世紀を経た今、人と人との会話の間に何か固いものがはさまっているように私には思える。子どもらが人間らしい人間に、心豊かな人間に育って欲しいと念じる大人達が人間らしく生きているだろうか？「自然環境から遮断されたコピー環境で暮らしている。」と言った人があるけれどこれでよいのだろうか？

三月、子ども達の春ははじまったばかり、これからみんなみんなが輝かしい未来に向けてはばたこうとしているのだ。老婆が今更何をする 것도、しわだらけの手を差しのべることもないのではないか。ああ、子ども達をひたすら信じ、彼等を大いなるものの中にゆだねよう。

いのち噴く 季の木ぐさの ささやきを ききてねむり合う 野の仏たち

生方たつゑ

そして、またしても思うのは陶淵明の帰去来の詩、「田園將にあれんとす、帰りなむいざ」である。子どもらのほんとうの教育を考え、自然にかえるという（ルソーのことば）意味をあらためて考えようと思う三月である。

(あとがき)

88 四月から十二回、この貴重な誌面を雑文のためにわけていただき、ありがとうございました。正直いって書くことはしゃべるよりましだと思っていました。正直いって書くことはしゃべるよりましだと思っていました。たのに、時々というより、毎回あまりの我が才能のなさにあきれ、うみ、うんざりしてしまいました。恥かしくもありました。読んでくださる方々、さぞ退屈なさったことを申しわけなくおわびいたします。終わってみて、でも、本当に沢山勉強させていただきました。文章のつくり方、まとめ方はもとより、四季おりおりの自然と人間とのかかわりについて少しは見方がかわったと思われまます。子どもたちの動きやことばを見る目も深くなったとはいえないまでも視点を広くできるようにはなれたかしら、と思えます。残り少ない我人生の貴重な一ときを与えていただきましたことを、深謝し、何かと沢山のご批判をいただきたいと心から願っております。

(音羽幼稚園)

